

姫路市

岩 端 町 遺 跡

－処遇管理棟・庁舎棟等新営工事に伴う発掘調査－

2006年3月

兵庫県教育委員会

姫路市

いわ ばな ちょう
岩 端 町 遺 跡

－処遇管理棟・庁舎棟等新営工事に伴う発掘調査－

2006年3月

兵庫県教育委員会

例　　言

1. 本書は、姫路市岩端町438に所在する岩端町遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は所内施設の新設工事に先立つもので、共に姫路少年刑務所からの委託を受け、兵庫県教育委員会が平成12年度・14年度・15年度に確認調査を、平成12年度・15年度に本発掘調査を実施した。
　調査は、第1次調査を兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所山田清朝が、第2次調査を同山本三郎・岸本一宏が担当した。
3. 調査後の空中写真の撮影は、第1次調査・第2次調査とも株式会社 大蔵に委託して行った。他の遺構の写真撮影・実測は調査員が実施した。
4. 整理作業は、平成17年度に兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所にて実施した。
5. 遺物の接合・実測・復元・トレースについては、上記事務所整理保存班で行った。
6. 遺物写真の撮影は、株式会社 アコードに委託し、平成17年度に行った。
7. 調査は、三角点をもとに三級基準点を設置しておこなった。なお、調査地は第V系に位置する。
　なお、第1次調査では旧測地系に基づいて測量を行ったが、本報告では、国土地理院が公開するプログラム「TKY2JGD」により、世界測地系への変換をおこなっている。經緯度についても同様である。このため、第1次調査・第2次調査の成果は、ともに世界測地系で統一している。
8. 本書に用いた方位は座標北を示す。また、標高は東京湾平均海水準を基準とした。
9. 本書に用いた遺物番号は、本文・挿図・図版とともに統一している。
10. 本書の編集は八木和子の補助を得て山田が行い、山本と山田が執筆した。
11. 本報告にかかる遺物は、兵庫県教育委員会魚住分館（明石市魚住町清水）に、写真は兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所に保管している。

目 次

第1章 岩畠町遺跡	1
第1節 遺跡の環境	1
1. 地理的環境	1
2. 歴史的環境	5
第2節 調査の経緯	7
1. 確認調査	7
2. 本発掘調査	9
3. 整理作業	10
第2章 調査の成果	11
第1節 第1次調査	11
第2節 第2次調査	23
第3章 まとめ	31

挿 図 目 次

第1図 遺跡の位置I	iii	第21図 SK02	19
第2図 遺跡の位置II	1	第22図 SK03	20
第3図 遺跡周辺の地形環境	2	第23図 SD03	21
第4図 明治40年 遺跡周辺地形図	3	第24図 SD04	21
第5図 明治34年 遺跡周辺市街図	4	第25図 出土石器	22
第6図 主要周辺遺跡	5	第26図 第1次調査出土土器	22
第7図 姫路少年刑務所と確認調査	7	第27図 土層断面図	23
第8図 第3次確認調査	8	第28図 第2次調査平面図	24
第9図 調査位置図	9	第29図 SD01	25
第10図 第1次調査	9	第30図 SD01出土土器	26
第11図 完成直前の京舎棟	10	第31図 SD03	27
第12図 第1次調査基本土層図	11	第32図 SB01	27
第13図 第1次調査平面図	12	第33図 SK01	28
第14図 捏立柱建物跡	13	第34図 SK02	29
第15図 SB01	14	第35図 SK03	29
第16図 SB02	15	第36図 SK04	29
第17図 SB03	16	第37図 SK05とSD01	30
第18図 SB04	17	第38図 遺構の変遷(1)	31
第19図 SB05	18	第39図 遺構の変遷(2)	32
第20図 SK01	19		

写真図版目次

写真図版 1 岩端町遺跡	写真図版 10 第 2 次調査
米軍空中写真	全景 西上空から　　全景 北上空から
写真図版 2 岩端町遺跡	写真図版 11 第 2 次調査
遺跡遠景 南上空から	全景 真上から
遺跡遠景 北東上空から	写真図版 12 第 2 次調査
写真図版 3 第 1 次調査	東側の遺構 南から
全景 北東上空から	SD01 ~ SD03 東から
全景 北西上空から	写真図版 13 第 2 次調査
写真図版 4 第 1 次調査	SD01・SD02 東から
全景 真上から	SD01 遺物出土状態 北西から
写真図版 5 第 1 次調査	写真図版 14 第 2 次調査
全景 南西から　　建物群 北西から	SB01 西から　　土坑群と溝 北から
建物群 北東から	写真図版 15 第 2 次調査
写真図版 6 第 1 次調査	SD01 土層断面 北西から
SB01 北東から　　SB01 - P 1 南から	SD01 と SK05 の土層断面 南から
SB01 - P 2 南から　　SB01 - P 3 南から	SD03 土層断面 南から
SB01 - P 4 南から　　SB01 - P 7 北から	写真図版 16 第 2 次調査
SB01 - P 8 北から	SK01 土層断面 南から
写真図版 7 第 1 次調査	SK03 土層断面 東から
SB02 北東から　　SB02 - P 2 北から	SK04 土層断面 北から
SB02 - P 3 北から　　SB02 - P 4 北から	写真図版 17 第 2 次調査
SB03 南西から	SD01 と SK05 の関係 西から
写真図版 8 第 1 次調査	南西壁土層断面 北から
SB03 - P 1 北から　　SB03 - P 2 北から	写真図版 18 出土遺物
SB03 - P 7 南から　　SB04 北東から	SB02 出土土器 (1・2・6)
SB04 - P 2 北から　　SB04 - P 3 北から	SB03 出土土器 (4・5・7)
SB04 - P 5 南から　　SB04 - P 6 南から	SD02 出土土器 (8)
SB04 - P 7 南から	第 1 次調査包含層出土土器 (3)
写真図版 9 第 1 次調査	写真図版 19 出土遺物
SK03 断面 南西から	SK03 出土土器 (9)
SK03 土器出土状況 南西から	第 2 次調査 SD01 出土土器 (10 ~ 15)
SD02 断面 西から	第 1 次調査出土石器



第1図 遺跡の位置 I

第1章 岩端町遺跡

第1節 遺跡の環境

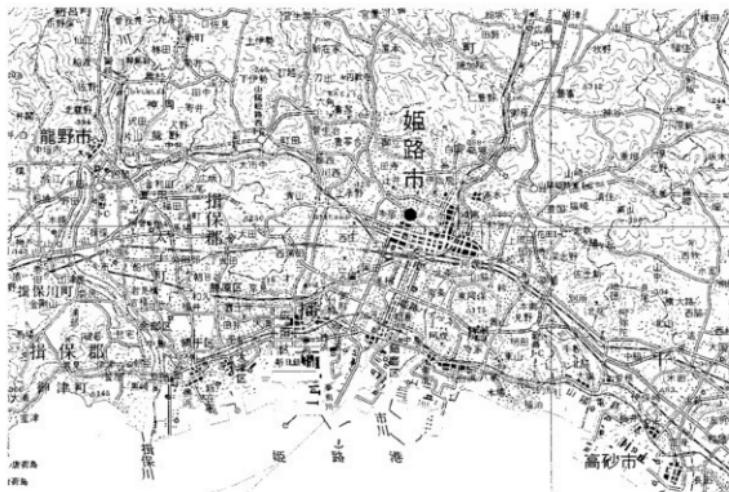
1. 地理的環境

姫路市 岩端町遺跡の所在する姫路市は、律令期には「播磨の市」を中心として、江戸時代以降は姫路城を中心とした城下町として栄えてきた町である。明治22年に市制が施行され、平成17年11月現在、人口約48万人、面積274.57km²の規模をほこる。当地は、城下町としてばかりではなく、古代以来畿内と西国を結ぶ山陽道が通り、さらには日本側と瀬戸内海側を結ぶルートの起点でもあったように、交通の要衝でもあった。

このため、兵庫県南西部、播磨地方における中核をなす都市に発展し、平成8年には中核都市に指定されている。なお、本書が刊行される平成18年3月には、平成の大合併により、飾磨郡家島町・夢前町と宍粟郡安富町及び神崎郡香寺町が合併する予定である。

姫路市は、姫路平野を中心に展開している。この姫路平野は、市川とその支流の船場川により形成された平野である。姫路平野の縁辺部には独立丘陵が存在し、平地との差が際立っている。この独立丘陵に近接した平地に立地するのが岩端町遺跡である（第3図）。

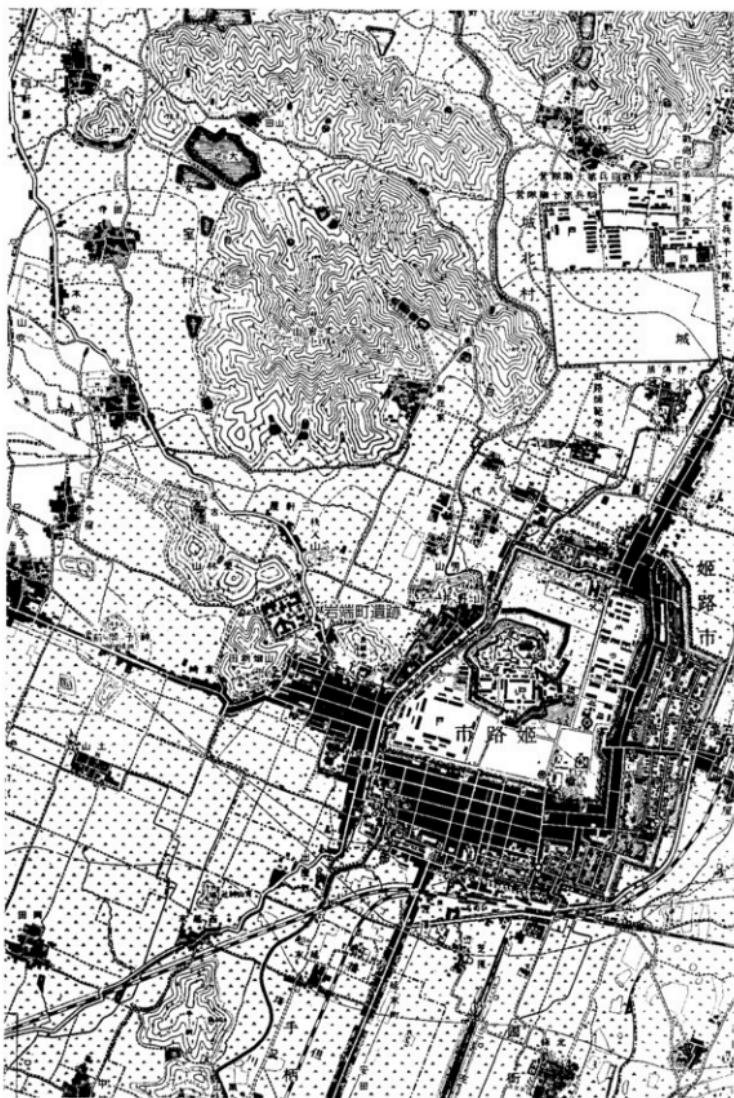
岩端町遺跡 岩端町遺跡は姫路平野の中央西側、名古山丘陵の東側に位置する。また、世界文化遺産に登録された国宝姫路城の西約1.20kmに位置する。埋立地を除いた海岸からの距離は、直線で約6.2kmを測る。調査地の現地表面における標高は、15.20～15.40mである。



第2図 遺跡の位置 II

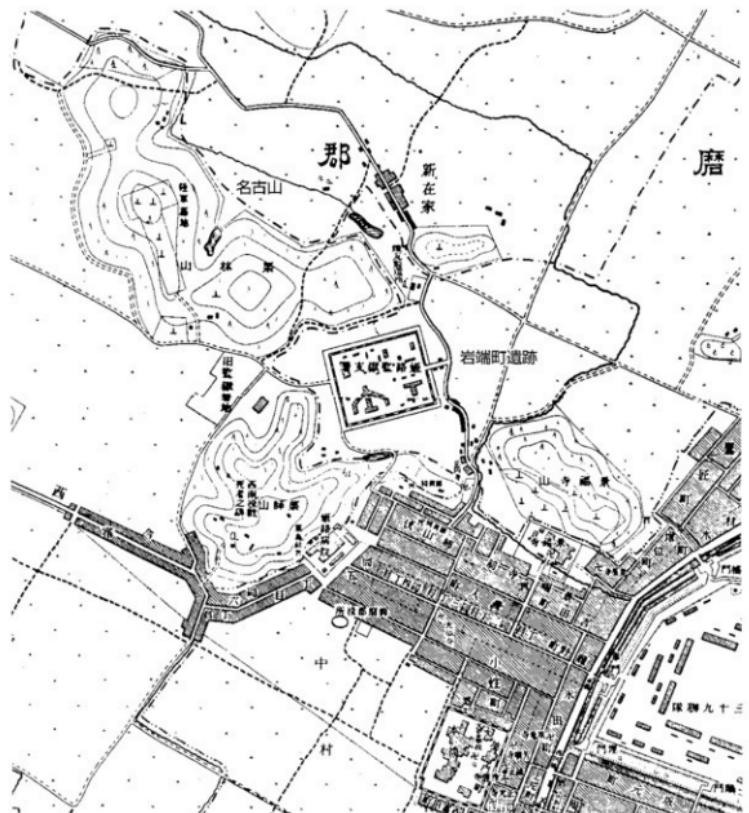


第3図 遺跡周辺の地形環境



第4図 明治40年 遺跡周辺地形図

姫路少年刑務所 当遺跡の大半は、姫路少年刑務所として利用されている。その敷地面積は 44363 m²を測る。当刑務所の歴史は、明治 31 年に当時鈴鹿郡高岡村にあった兵庫県姫路監獄支所が移



第5図 明治 34 年 遺跡周辺市街図

転してきたことに始まる。その後、神戸刑務所姫路支所（大正 11 年）を経て、昭和 2 年から現在の姫路少年刑務所となっている。この間、昭和 20 年には空襲を受け、建物の大半を焼失している。このように、明治時代以来広大な面積を刑務所として当地が利用されてきたため、当地の地形を復元することは困難である。

遺跡の立地

ただし、明治 40 年陸地測量部作成の地形図（第 4 図）をみると、当刑務所の周囲の地目は水田となっている。また、明治 34 年第十師団司令部発行の姫路市街図（第 5 図）によると、刑務所は丘陵部を開発したものではなく、平地に建設されたものと読み取ることができる^⑪。これを裏付けるように、調査による土層観察では、基盤層の層相が沖積地の特徴を示している。

以上から、岩端町遺跡の基盤層は、市川もしくはその支流の堆積作用に起因する可能性が高いものと判断される。よって、岩端町遺跡は沖積地に立地するものと考えられる。

2. 歴史的環境

岩端町遺跡周辺には多くの遺跡が周知されている。後述するように、岩端町遺跡は弥生時代中期を中心とした遺跡である。そこで、調査が行われた弥生時代の遺跡を中心に概観する(第6図)。



- | | |
|----------------------------|---------------------------|
| 1. 岩端町遺跡 (020572) | 10. 今宿丁田遺跡 (020165) |
| 2. 名古山遺跡 (020164) | 11. 土山遺跡 (020452) |
| 3. 山吹遺跡 (020160) | 12. 八反長遺跡 (020446) |
| 4. 辻井遺跡 (020162) | 13. 千代田遺跡 (020453) |
| 5. 大谷口遺跡 (020162) | 14. 南畠町遺跡 (02046) |
| 6. 山崎山古墳群 (020859-65) | 15. 豆腐町遺跡 (010459) |
| 7. 八代山古墳群 (020173-78) | 16. 仮称 姫路駅周辺第4地点 (020464) |
| 8. 八代深田遺跡 (020166) | 17. 仮称 姫路駅周辺第1地点 (020460) |
| 9. 姫路城跡・姫路城下町跡 (020168-69) | 18. 仮称 姫路駅周辺第2地点 (020461) |

()内は遺跡番号

第6図 主要周辺遺跡

当該期の遺跡としては、名古山遺跡（2）・辻井遺跡（4）・八代深田遺跡（8）・豆腐町遺跡（15）・仮称 姫路駅周辺第1地点遺跡（17）・仮称 姫路駅周辺第2地点遺跡（18）・今宿丁田遺跡（10）などが、発掘調査によりその内容が明らかとなっている。

名古山遺跡 当遺跡の北西側の栗林山と名古山に挟まれた北側鞍部に立地する遺跡である。弥生時代中期後半の竪穴住居跡が3棟確認され、そのなかの1棟が完掘されている。この結果、完掘した住居跡から銅鐸の範囲片が出土し、大変注目されている。⁽²⁾

辻井遺跡 当遺跡の北西側、名古山のさらに北西側の沖積地に立地する遺跡である。弥生時代に関しては、前期の土器が出土している。

八代深田遺跡 当遺跡の北東約500mに位置する遺跡である。弥生時代中期後半および弥生時代後期～古墳時代前期の土器がまとめて出土している。当遺跡を考える上で、重要な位置をしめる遺跡である。⁽³⁾

豆腐町遺跡 JR姫路駅構内に位置する遺跡である。兵庫県教育委員会の調査により、弥生時代前期の溝、弥生時代終末期の土坑群が明らかになっている。⁽⁴⁾

第1地点遺跡 姫路駅周辺土地区画整理事業に伴い、姫路市教育委員会によって調査がおこなわれている。調査の結果、弥生時代前期の溝・土坑、弥生時代中期後半の土器溜りなどが検出されている。また平成8年度に、同遺跡を、兵庫県教育委員会が北条遺跡として調査を実施し、弥生時代前期の旧河道・弥生時代後期の竪穴住居跡・古墳時代前期の竪穴住居跡が検出されている。⁽⁵⁾

第2地点遺跡 第1地点遺跡同様、姫路駅周辺土地区画整理事業に伴い、姫路市教育委員会により調査がおこなわれている。調査の結果、弥生時代中期後半の竪穴住居跡・土坑・溝・土器溜りなどが検出されている。⁽⁶⁾

今宿丁田遺跡 1980年に調査がおこなわれ、扁平鍔式段階の銅鑄錫型が出土している。同じ層から出土した土器から、第IV様式併行期に位置付けられている。名古山遺跡とともにほぼ同時期に位置付けられる遺跡で、岩端町遺跡との関係で注目される。⁽⁷⁾

〔註〕

- (1) 姫路市『姫路市史 第十二巻 付図』1989
- (2) 上田哲也・河原隆彦『播磨の弥生文化』1966
- (3) 山本博利・秋枝 芳『八代深田遺跡－姫路市八代字深田－』姫路市教育委員会 1977
- (4) 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所『豆腐町遺跡 現地説明会資料』2001
- (5) 秋枝 芳「北条遺跡（第1次調査）」「TUBOHORI 平成8年度（1996）姫路市埋蔵文化財調査略報」姫路市教育委員会 1998
- (6) 山田清朝「北条遺跡」「平成8年度 年報」兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 1997
- (7) 秋枝 芳「（仮称）姫路駅周辺第2地点遺跡（第1次調査）」「TUBOHORI 平成7年度（1995）姫路市埋蔵文化財調査略報」姫路市教育委員会 1997
- (8) 山本三郎「国内における青銅器館とその遺跡 近畿1－兵庫」「シンポジウム 青銅器の生産終末期古墳の諸問題」日本考古学協会編 1989

第2節 調査の経緯

はじめに 姫路少年刑務所は、所内施設の新営工事に伴い、4次にわたる確認調査（第1次確認調査～第4次確認調査）を実施した（第7図）。この結果、第1次確認調査と第3次確認調査で、埋蔵文化財の包蔵が明らかとなり、本発掘調査を実施することとなった。これが、第1次調査と第2次調査である。そして、この2次におよぶ本発掘調査の成果をまとめたのが、本報告書である。各調査の概要は以下のとおりである。

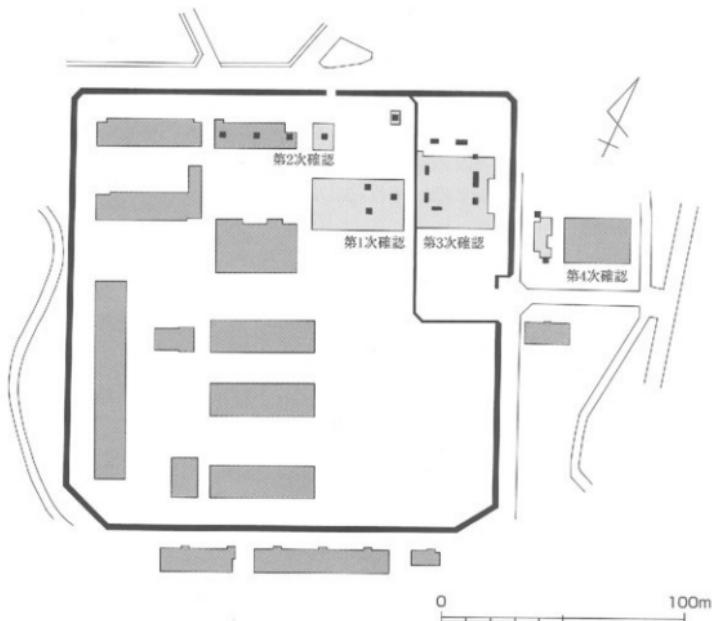
1. 確認調査

第1次確認調査 処遇管理棟新営工事に伴う確認調査である。3箇所にグリッドを設定し、埋蔵文化財の有無について、調査をおこなった。この結果、弥生時代後期の柱穴と溝状遺構が明らかとなり、事業予定地内には埋蔵文化財が包蔵されているとの判断に至った。

遺跡調査番号 990298

調査時期 平成12年1月25日

調査担当 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 高瀬一嘉



第7図 姫路少年刑務所と確認調査

第2次確認調査 医務棟・出所準備室棟・鑑定室の新営工事に伴う確認調査である。第1次調査を実施した地区の北東側から北側にかけての一帯を対象とした。第1次調査の結果、当事業予定地まで埋蔵文化財が包蔵されている可能性が高くなつたため、確認調査を実施したものである。5箇所にグリッドを設定し、埋蔵文化財の有無についての確認をおこなつた。

調査の結果、一部のトレンチで土器の出土が認められた以外は、遺構等を確認することはできなかつた。このため、当地には埋蔵文化財の包蔵は認められないものと判断するに至つた。

遺跡調査番号 2000278

調査時期 平成14年5月13日

調査担当 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 山田清朝

第3次確認調査 庁舎棟等の新営工事に伴い行った調査である。第1次調査地の北東側にあたり、第1次調査で検出された遺構が当地まで拓がる可能性が考えられたため、確認調査を実施した。8箇所にグリッドを設定し、埋蔵文化財の有無についての確認を行つた(第8図)。この結果、柱穴と溝状遺構が明らかとなり、事業予定地内には埋蔵文化財が包蔵されていることが明らかとなつた。

遺跡調査番号 2002050

調査時期 平成14年5月13日

調査担当 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 山田清朝

第4次確認調査 待機所の新営工事に伴い行った調査である。待機所用地の最も東側にあたる。2箇所にグリッドを設定し、埋蔵文化財の有無についての確認をおこなつた。遺構・遺物は全く認められず、埋蔵文化財は包蔵されていないとの判断に至つた。

遺跡調査番号 2002237

調査時期 平成15年2月28日

調査担当 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 甲斐昭光



第8図 第3次確認調査



第9図 調査位置図

2. 本発掘調査

確認調査の結果に基づき、2次にわたる（第1次調査・第2次調査）本発掘調査を実施した（第9図）。また、第1次調査終了後の6月8日には、姫路少年刑務所庁舎内にて、出土遺物とパネルを中心に地元市民を対象とした説明会を開催した。各本発掘調査の概要是以下のとおりである。

第1次調査 第1次確認調査の結果に基づき実施された調査である。

進捗調査番号 2000185

調査時期 平成12年5月9日～6月13日

調査面積 859 m²

調査体制 調査主体 兵庫県教育委員会

調査担当 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 山田清朝

調査補助員 中谷悟史



第10図 第1次調査

第2次調査 第3次確認調査の結果に基づき実施された調査である。

遺跡調査番号 2003190

調査時期 平成15年11月26日～12月26日

調査面積 617 m²

調査体制 調査主体 兵庫県教育委員会

調査担当 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 山本三郎・岸本一宏

調査補助員 清水洋子

3. 整理作業

平成17年度の1箇年で、出土土器の接合・実測・復元・写真撮影、造構図・実測図の整図・レイアウト・トレース、編集作業をおこなった。整理体制は、以下の通りである。

整理担当職員 整理保存班 森内秀造

調査班 山本三郎・山田清朝

嘱託員 八木和子・吉田優子・垣木明美・河上智晴



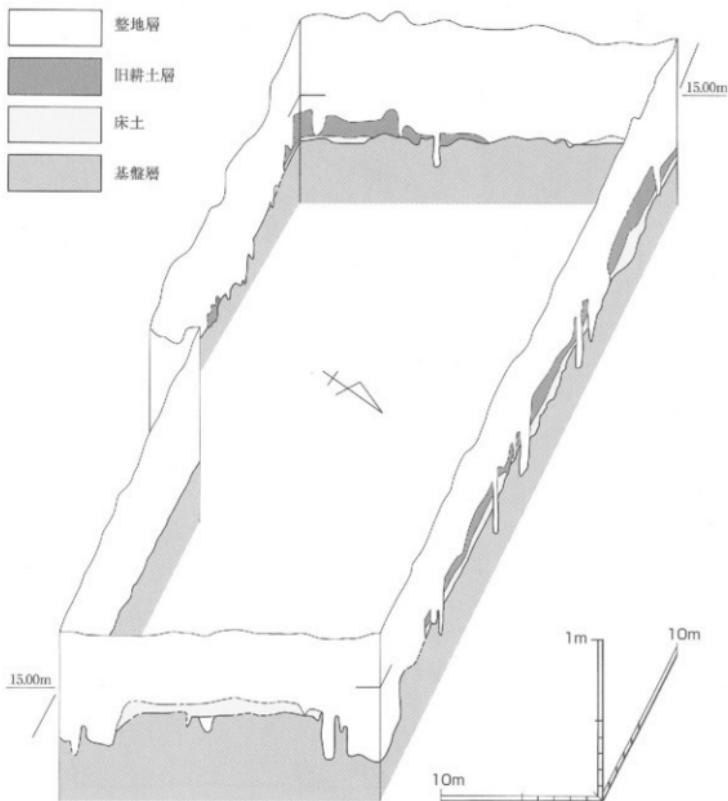
第11図 完成直前の庁舎棟

第2章 調査の成果

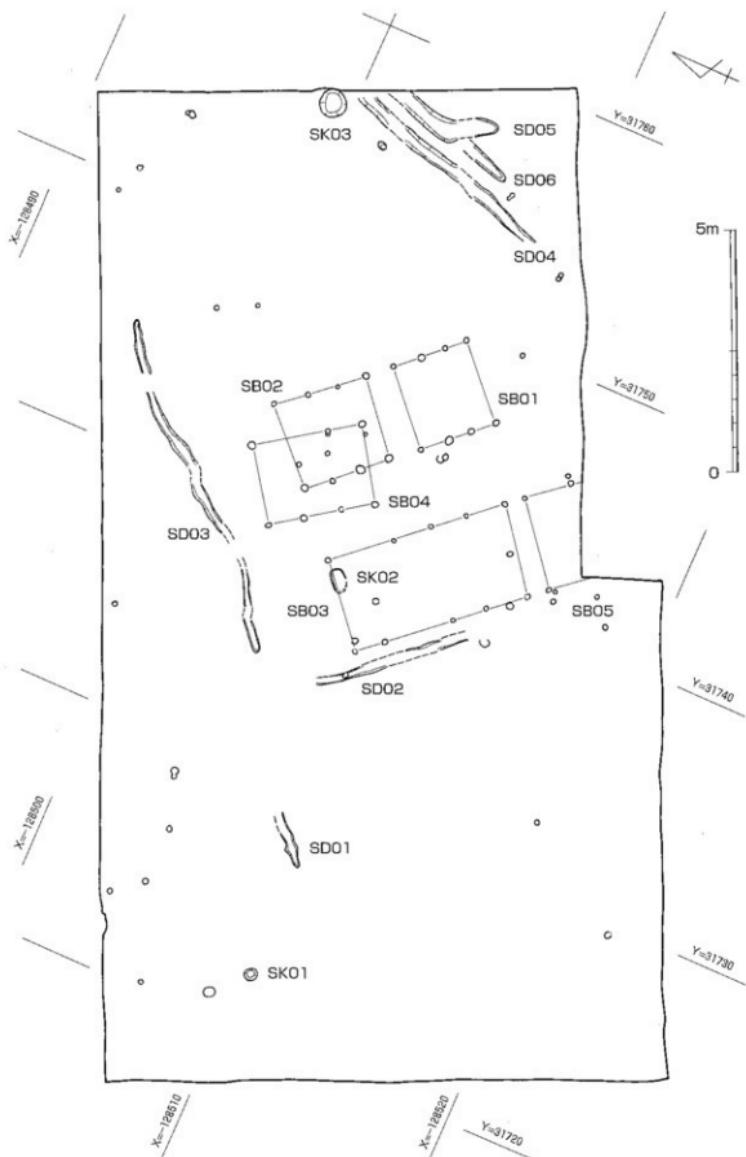
第1節 第1次調査

1. 概要

調査地は、以前処遇管理堆が建てられていたところである。また、遺構検出面は、現地表面下約40cmの浅さである。このため、建物の基礎部分を中心にその影響が顕著で、遺構の検出は困難であった。この結果、遺構が検出できたのは、建物基礎の影響が及んでいない箇所に限られている。



第12図 第1次調査基本土層図



第13図 第1次調査平面図

2. 基本土層と遺構の検出

基本土層

前項で報告したように、遺構面のレベルは、現地表面から 40 cm にすぎない。このため、基本土層（第 12 図）そのものは比較的単純である。加えて、上層の多くは、建物建設およびその後の土地利用による整地・盛土層となっていた。この層のなかには、昭和 20 年に受けた空襲によると考えられる焼土層も認められた。その下層は、旧耕作土層・床土層・基盤層となっており、いわゆる遺物包含層は認められなかった。

基盤層は黄灰色シルト混じり極細砂～シルト質極細砂で、その層相から判断して、繩文海進以降に堆積した層と考えられる。このことから、当遺跡は、完新世段丘面上に立地するものと考えられる。また、基盤層の粒子を観察すると、東側のほうが粗く、東側からの堆積と判断される。また、南東部を中心に、繩文時代に形成された中州と考えられる疊層も部分的に認められた。

遺構の検出

遺構面は 1 面のみである。基盤層上面で検出した。

3. 遺構と遺物

掘立柱建物跡・柱穴・土坑・溝を検出した。検出した遺構は、調査面積と比較すると多くはなく、調査区中央部から北東側に集中する傾向が認められる。逆に、南西側ではほとんど検出されていない。また、遺物の出土も、遺構内外を問わずわずかである。

(1) 掘立柱建物跡

5 棟 (SB01 ～ SB05) 検出した（第 13 図）。これらの建物は、調査区中央部に集中する傾向にある。ただし、SB02 と SB04 が平面的に重複するように、5 棟の建物が同時に機能していたものではない。



SB01 (写真図版 6)

第 14 図 掘立柱建物跡

検出状況

調査区中央北東側で検出した（第 13 図）。調査区内で、建物全体が検出されている。

SB02 の東側に位置する。

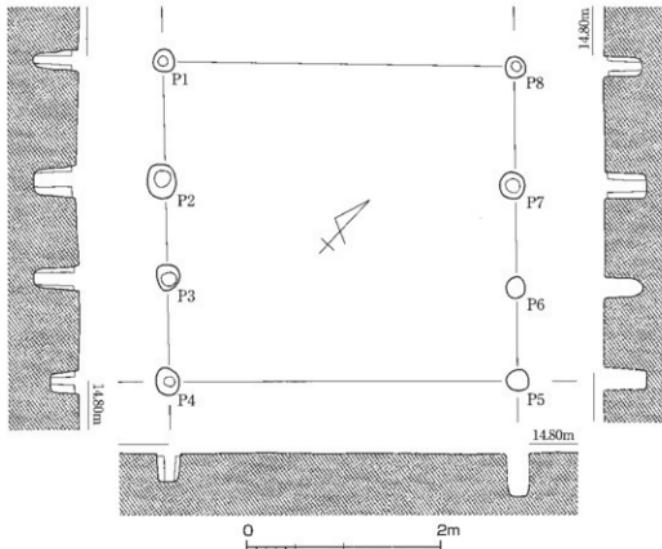
建物規模

梁行 1 間、桁行 3 間の側柱建物である（第 15 図）。各柱穴間の規模およびその平均値は、第 1 表の通りである。北東桁行を基準とした柱軸方向は、N 44° 0' W を示す。

第 1 表 SB01 柱穴・建物規模一覧表

No	概方規模 (cm)	柱痕径 (cm)	深さ (cm)
P 1	23.0	10.0	48.0
P 2	35.0	17.0	45.0
P 3	26.0	13.0	47.0
P 4	28.0	10.0	30.0
P 5	23.0		(44.0)
P 6	22.0		(39.0)
P 7	28.0	14.0	43.0
P 8	23.0	10.0	40.0

	柱間	柱穴間距離 (m)	側面距離 (m)	柱穴間平均距離 (m)
南北桁行	P 1 - P 2	1.20		
	P 2 - P 3	1.05		
北西梁行	P 3 - P 4	1.05	3.30	1.10
	P 1 - P 8	3.64	3.64	3.64
	P 5 - P 6	0.97		
北東桁行	P 6 - P 7	1.05		
	P 7 - P 8	1.22	3.24	1.08
	P 4 - P 5	3.58	3.58	3.58



第15図 SB01

柱穴規模 柱穴は8穴検出された。柱穴の平面形は円形を基本形とする。各柱穴の規模は、第1表のとおりである。

出土遺物 P1・P3・P8から土器の小片が出土している。固化はもちろんのこと、器種の特定も困難である。胎土等の特徴から、弥生時代中期と考えられる。

時期 出土土器から、弥生時代中期と判断される。

SB02(写真図版7)

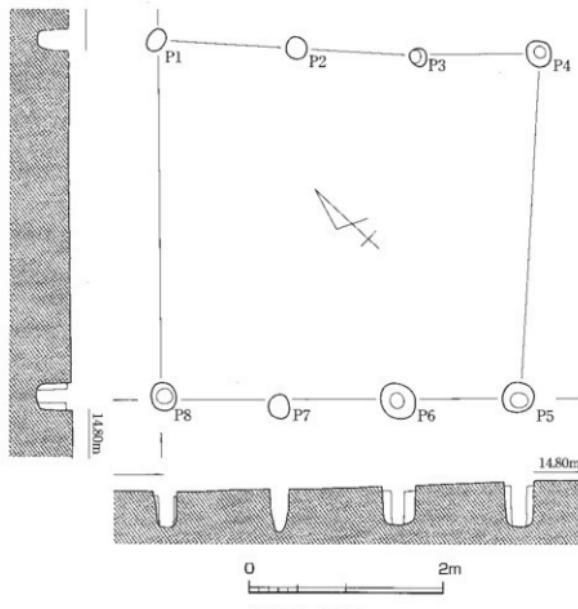
検出状況 調査区中央部で検出した(第13図)。SB04と一部平面的に重複するが、調査区内で建物全体が検出されている。SB01の西側、SB03の北側に位置する。

建物規模 梁行1間、桁行3間の楕柱建物である(第16図)。各柱穴間の規模およびその平均値は、第2表の通りである。南西桁行を基準とした棟軸方向は、N 43° 0' Wを示す。

第2表 SB02 柱穴・建物規模一覧表

No	掘方規模 (cm)	柱直径 (cm)	深さ (cm)
P 1	23.0		(32.0)
P 2	21.0		48.0
P 3	16.0	11.0	42.0
P 4	25.0	12.0	42.0
P 5	34.0	17.0	46.0
P 6	36.0	14.0	40.0
P 7	21.0		45.0
P 8	26.0	16.0	37.0

	柱間	柱穴間距離 (m)	側面距離 (m)	柱穴間平均距離 (m)
北東桁行	P 1 - P 2	1.44		
	P 2 - P 3	1.25		
	P 3 - P 4	1.26	3.95	1.32
北西桁行	P 1 - P 8	3.65	3.65	3.65
	P 5 - P 6	1.25		
南西桁行	P 6 - P 7	1.23		
	P 7 - P 8	1.17	3.65	1.22
南東桁行	P 4 - P 5	3.60	3.60	3.60



第16図 SB02

柱穴規模 柱穴は8穴検出された。柱穴の平面形は円形を基本形とする。各柱穴の規模は、第2表のとおりである。

出土遺物 P5から2と6が、P6から1が、それぞれ出土している(第26図)。

1は、広口壺の口縁部から体部上半にかけて残存する個体である。口縁部外面は、綫方向のヘラミガキが施され、上端部付近に1条、頸部に3条の凹線が施されている。内面は横ナデ調整により仕上げられている。体部外面は綫方向のハケ調整で仕上げられ、その後最大径部を中心に横方向のヘラミガキが施されている。内面は綫方向のハケ調整により仕上げられ、頸部付近に弱いヘラ削りが加えられている。

2も1と同タイプの壺である。内外面ともハケ調整により仕上げられている。外面上部には2条の、頸部付近には2条の凹線文が施されている。

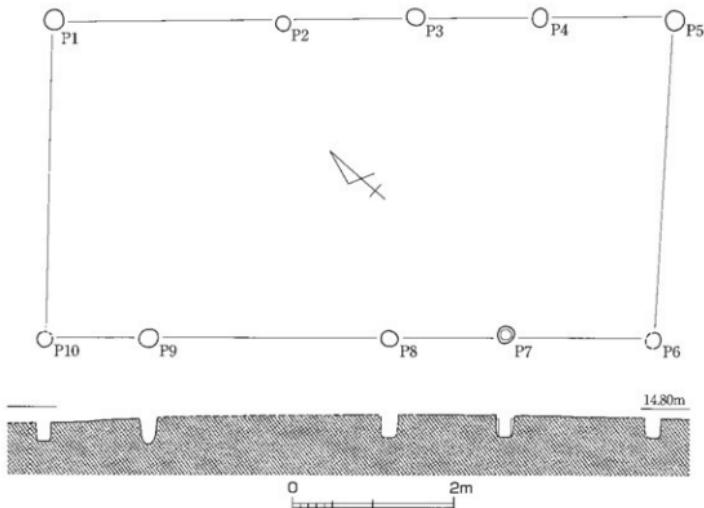
6は脚端部である。内面はヘラ削り(左→右)により、他は横ナデ調整により仕上げられている。

時期 出土土器から、弥生時代中期後半と判断される。

SB03(写真図版7・8)

検出状況 調査区中央部で検出した(第13図)。調査区内で建物全体が検出されている。SB05の西側、SB01・02・04の南側に位置する。

建物規模 栄行1間、桁行5間の倒柱建物である(第17図)。調査時においては、栄行は4間と考



第17図 SB03

えていたが、整理の過程において、5間と判断したものである。ただし、後世の搅乱を受け、北東側がP1-P2間で、南西側がP8-P9間で、それぞれ1穴ずつ検出できなかつた。各柱穴間の規模およびその平均値は、第3表の通りである。南西桁行を基準とした棟軸方向は、N 41° 30' Wを示す。

柱穴規模 10穴検出した。各柱穴の規模は、第3表のとおりである。

P3から7が、P6から4が、P7から5が、それぞれ出土している(第26図)。

出土遺物 4は甕の底部である。内面がヘラ削り、他はナデ調整により仕上げられている。5は、鉢もしくは高壺と考えられる。口縁部外面には1条の凹線が施されている。ただし、全体的に磨滅が著しく、調整の観察は困難である。7は、器台の底部を中心とした個体である。外面下縁部には1条の、その上縁には6条の凹線文が施されている。凹線文間は

外縁下縁部には1条の、その上縁には6条の凹線文が施されている。凹線文間は

第3表 SB03 柱穴・建物規模一覧表

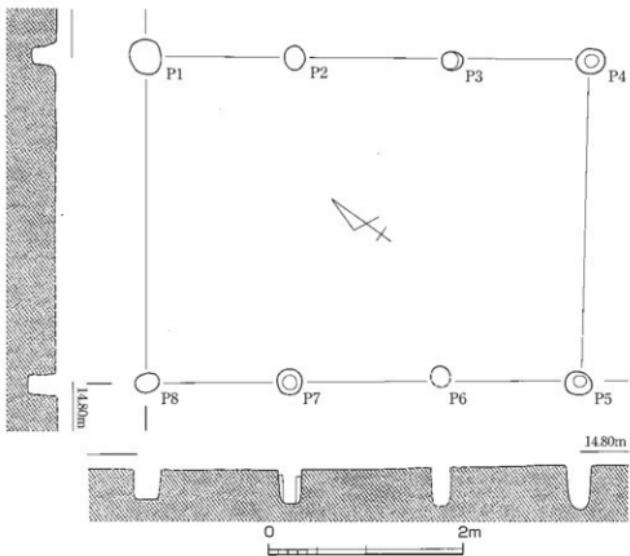
No	掘方規模(cm)	柱直径(cm)	深さ(cm)
P 1	24.0		37.0
P 2	17.0		46.0
P 3	22.0		30.0
P 4	18.0		(47.0)
P 5	23.0		22.0
P 6	19.0		24.0
P 7	20.0	14.0	27.0
P 8	21.0		(28.0)
P 9	23.0		33.0
P 10	19.0		24.0

	柱間	柱穴間距離(m)	側面距離(m)	柱穴間平均距離(m)
北東桁行	P 1-P 2	2.82		7.74
	P 2-P 3	1.63		
	P 3-P 4	1.54		
南西桁行	P 4-P 5	1.75		1.55
	P 5-P 6	3.95	3.95	3.95
	P 6-P 7	1.82		6.24
	P 7-P 8	1.45		
南西桁行	P 8-P 9	2.97		1.25
	P 9-P 10	1.28		
	P 1-P 10	3.96	3.96	3.96

横ナデ調整により仕上げられている。内面は横ナデ調整により仕上げられている。

この他、図化できなかったが、P2とP9から、壺の体部の小片が出土している。これらも中期後半の特徴を示すものである。

時 期 出土土器から、弥生時代中期後半と判断される。



第18図 SB04

SB04(写真図版8)

検出状況 調査区中央部で検出した(第13図)。調査区内で建物全体が検出されている。SB01の東側、SB03の北側に位置する。

建物規模 乗行1間、桁行5間の側柱建物である(第18図)。各柱穴間の規模およびその平均値は、第4表の通りである。南西桁行を基準とした棟軸方向は、N 36° 0' Wを示す。

第4表 SB04 柱穴・建物規模一覧表

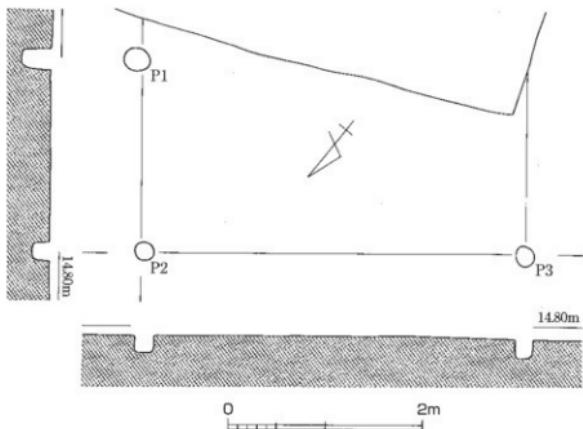
No	掘方規模 (cm)	柱直径 (cm)	深さ (cm)
P 1	37.0		26.0
P 2	24.0		33.0
P 3	22.0	17.0	36.0
P 4	29.0	13.0	44.0
P 5	27.0	13.0	46.0
P 6	19.0		(40.0)
P 7	25.0	14.0	35.0
P 8	25.0		(30.0)

	柱 間	柱穴間距離 (m)	側面距離 (m)	柱穴間平均距離 (m)
北東桁行	P 1 - P 2	1.34	4.60	1.53
	P 2 - P 3	1.60		
	P 3 - P 4	1.46		
南東桁行	P 4 - P 5	3.30	3.30	3.30
	P 5 - P 6	1.44	4.47	1.49
	P 6 - P 7	1.55		
南西桁行	P 7 - P 8	1.48	4.47	1.49
	P 1 - P 8	3.36	3.36	3.36

柱穴規模	8穴検出した。各柱穴の規模は、第4表のとおりである。
出土遺物	P1・P5・P6から小片が出土している。いずれも、図化はもちろんのこと、器種の特定も困難である。胎土等の特徴から、弥生時代中期と考えられる。
時期	出土土器から、弥生時代中期と判断される。

SB05

検出状況	調査区中央部東端で検出した(第13図)。建物の一部を検出したにとどまり、大半は調査区外に拡がるものと考えられる。SB03の南東側に位置する。
建物規模	棟行方向が1間で、桁行方向では1間分検出した側柱建物である(第19図)。柱穴間の規模は、P1-P2間で2.0m、P2-P3間で3.90mを測る。北東桁行を基準とした棟軸方向は、N 39° O' Wを示す。
柱穴規模	柱穴は3穴検出した。各柱穴の掘り方径及び検出面からの深さは、P1で26cm・30cm、P2で20cm・17cm、P3で18cm・18cmである。
出土遺物	全く出土していない。
時期	土器が出土していないため、時期の特定は困難である。ただし、SB03と棟軸方向をほぼ同じくすることから、弥生時代中期後半と考えられる。



第19図 SB05

(2) 柱穴

上記建物を構成する柱穴以外にも、数穴検出されている。これらの柱穴からは、甕を中心とした土器の小片が出土している。胎土等の特徴から、弥生時代中期を中心とした時期と考えられる。

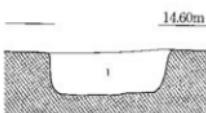
(3) 土坑

3基検出した。

SK01

検出状況 調査区西隅で検出した(第13図)。SD01の南西に位置する。他の遺構との切り合い関係は認められない。

規模 平面形は橢円形を呈する。その規模は、主軸方向で75cm、その直交方向で50cmを測る。横断面は箱型に近い逆台形をなし、最深部における検出面からの深さは18cmを測る。



1.暗黒褐色シルト混じり砂



第20図 SK01

埋没状況 暗黒褐色シルト混じり砂1層からなる(第20図)。その層相から、人為的に埋められたものと判断される。

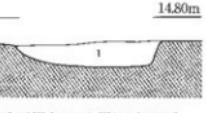
出土遺物 土器の小片が出土している。胎土等の特徴から、中期に位置付けられるものと考えられる。

時期 出土土器から判断して、弥生時代中期と考えられる。

SK02

検出状況 調査区中央部で検出した(第13図)。SB03の北隅に位置する。後世の搅乱を受け、全体の1/2程度検出できたにとどまる。他の遺構との切り合い関係は認められない。

規模 平面形は隅丸長方形を呈していたものと推測される。その規模は、主軸方向で130m残存し、その直交方向で60cmを測る。横断面は逆台形をなす。ただし、一部は皿形をなしている。最深部における検出面からの深さは10cmである。



1.暗灰褐色シルト混じり極細砂



第21図 SK02

SK03(写真図版9)

検出状況 調査区東北端中央部で検出した(第13図)。後世の搅乱を受けることなく、全体を検出することができた。他の遺構との切り合い関係は認められない。

規模 平面形はほぼ円形に近く、その規模は165m×150mを測る。横断面は箱型に近い逆台形をなし、底部はほぼ平坦である。最深部における検出面からの深さは76cmを測る。

埋没状況 6層からなる(第22図)。層相から、最上層の1層は人為的に埋められた層と判断される。また、2~5層は黄灰色砂をブロック状に含み、周囲からの流れ込みにより堆積した層と判断される。また最下層の6層は、自然堆積によるものと判断される。

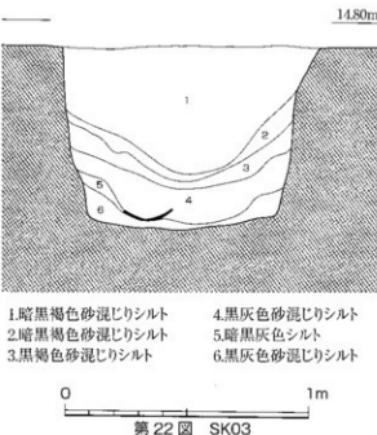
出土遺物 土坑中央部6層上面に、甕(9)の下半部が底部を下にして置かれた状態で出土している(写真図版9)。

9(第26図)は、体部のみ残存する。球形をなし、底部も丸底である。内面は斜方向(左

下左下→右上)のヘラ削りにより、外面は縦方向を主体としたハケ調整により仕上げられている。また、外面全体に煤の付着が認められ、特に最大径部より上側の付着が顕著である(写真図版19)。さらに内面には、多くの炭化米が付着している。

この他、固化できなかったが、叩きが施された甕の体部小片も出土している。

時 期 出土土器から判断して、古墳時代前期と考えられる。



第22図 SK03

(4) 溝

4条検出した。いずれもほぼ同規模かつ小規模である。また、先述したように、建物基礎による擾乱が顕著で、どの溝も寸断された状況で検出されている。

SD01

検出状況 調査区西部で検出した(第13図)。ほぼ直線的な溝で、南端は調査区内で収束し、北端部は擾乱を受け、途切れている。SD03とはほぼ同様の、SD02とは直交する方向性を示している。他の遺構との切り合い関係は認められない。

規 模 2.40 m検出した。横断面は逆台形をなし、検出面における幅は30 cm、最深部における検出面からの深さは5 cmを測る。

埋没状況 暗黒褐色シルト1層からなる。

出土遺物 土器の小片が出土している。胎土等の特徴から、弥生時代中期以降と判断される。

時 期 出土土器から判断して、弥生時代と考えられる。

SD02(写真図版9)

検出状況 調査区中央部で検出した(第13図)。SB03の南側に位置する。擾乱により寸断されているが、他の遺構との切り合い関係は認められない。東西方向に直線的な溝で、両端とも調査区内で途切れている。SB03平行方向とはほぼ一致する。また、その方向はSD01・03とは直交関係にある。

規 模 6.60 m検出した。横断面は逆台形をなし、検出面における幅30 cm、最深部における検出面からの深さ19 cmを測る。

埋没状況 暗灰褐色小礫混じりシルト1層からなる。その層相から、人為的に埋められたものと判断される。

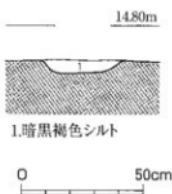
出土遺物 8は甕の底部が出土している(第26図)。内面はナデ調整により仕上げられている。

時 期 出土土器およびSB03との関係から、弥生時代中期後半と考えられる。

SD03

検出状況 調査区中央部西側で検出した(第13図)。建物群の西側に位置する。攪乱により4箇所で寸断されているが、他の遺構との切り合い関係は認められない。蛇行傾向にはあるが、全体的にはほぼ直線的な溝で、両端とも調査区内で収束している。その方向性は、SD01と同じくし、SD02とは直交関係にある。また、SB01～SB03の渠行方向とはほぼ一致する。

規模 15.55 m検出した。横断面は逆台形をなし、検出面における幅は31 cm、最深部における検出面からの深さは5 cmを測る。



第23図 SD03

埋没状況 暗黒褐色シルト1層からなる(第23図)。

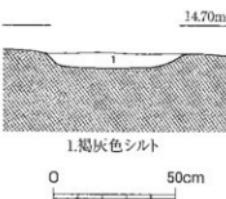
出土遺物 土器の小片が出土している。胎土等の特徴から、弥生時代中期以降と判断される。

時期 出土土器および建物群との関連から、弥生時代中期後半と考えられる。

SD04

検出状況 調査区中央部で検出した(第13図)。SB03の北隅に位置する。後世の攪乱を受け、全体の1/2程度検出できたにとどまる。他の遺構との切り合い関係は認められない。

規模 9.45 m検出した。横断面は逆台形をなし、検出面における幅は56 cm、最深部における検出面からの深さは7 cmを測る。



第24図 SD04

埋没状況 褐灰色シルト1層からなる(第24図)。

出土遺物 全く出土していない。

時期 SD05との関連から、平安時代後期と考えられる。

SD05

検出状況 調査区東隅で検出した(第13図)。南北方向から北西～南東方向に屈曲する直線的な溝である。SD04の東側に位置し、一部はほぼ平行する。北端部は調査区外まで伸び、他端は調査区内で収束している。他の遺構との切り合い関係は認められない。

規模 3.90 m検出した。横断面は皿形に近い逆台形をなす。検出面における幅は75 cm、最深部における検出面からの深さは6 cmを測る。

埋没状況 褐灰色シルト1層からなる。

出土遺物 土師器の碗の底部片が出土している。底部は輪高台をなすもので、平安時代後期の特徴を示すものである。

時期 出土土器から、平安時代後期～鎌倉時代初頭と考えられる。

SD06

検出状況 調査区東隅で検出した(第13図)。SD04の東側に位置し、これと平行する。SD05とは攪乱により直接的な関係を明らかにすることは出来なかった。ただし、両者の位置関係

位置関係から判断して、SD05 に切られている可能性が高い。他の遺構との切り合い関係は認められない。

規 模 210 m検出した。横断面は皿形に近い逆台形をなす。検出面における幅は 60 cm、最深部における検出面からの深さは 6 cm を測る。

埋没状況 灰色シルト 1 層からなる。

出土遺物 全く出土していない。

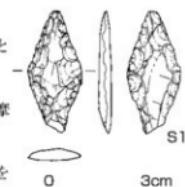
時 期 SD04・SD05 との関係から、平安時代後期～鎌倉時代初頭と考えられる。

(5) その他

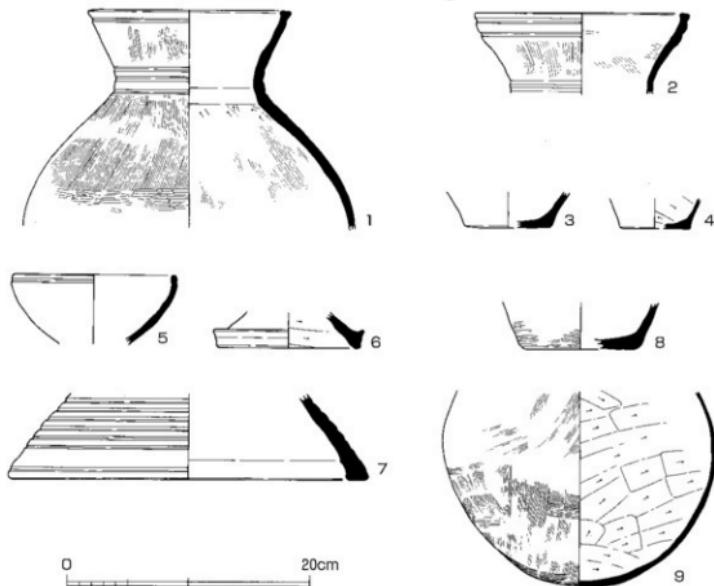
以上の遺構に伴って出土した遺物の他に、包含層から土器と石器が出土している。

土 器 壺の底部片(3)が出土している(第 26 図)。内外面とも、摩滅のため調整は観察できない。

石 器 サヌカイト製の石鏸が 1 点出土している(第 25 図)。基部を欠く以外は完存する。長さ・幅は 3.75 cm・1.65 cm を測り、中央部の厚みは 3.5 mm である。また、残存重量は 2.3 g である。



第 25 図 出土石器



第 26 図 第 1 次調査出土土器

第2節 第2次調査

1. 概要

第2次調査は庁舎棟等新営工事に伴う本発掘調査である。調査地は、以前は姫路少年刑務所の旧道場が建っていたところであり、その基礎などにより、遺構面が大きく搅乱を受けている部分が広範囲に認められた。

遺構面や遺構を検出したのは、調査区を4分割した場合の南東部と南西部のみであった。この地区においても旧建物の基礎溝とみられる搅乱によって遺構は分断されたり、削平を受けている状態であった。このことは遺構面が現地表面から約35cm前後の深さであるということも基因しているのであろう。

検出した遺構は、弥生時代の溝・柱穴、中世の掘立柱建物・土坑・溝・ピットである。遺構は密集したような状態を示さず、その数も多くはない。

2. 基本土層と遺構の検出

基本土層

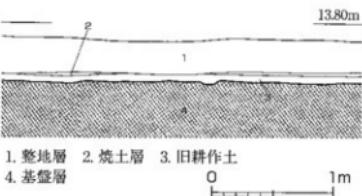
遺構面の標高は13.75m前後である。現地表面から35cm前後で遺構面に達する。このため、基本土層（第27図）はきわめて単純であることは第1次調査の結果と同じである。2層は、第2次世界大戦時の昭和20年に受けた空襲によって被災したときの焼土層と捉えられ、1層は昭和20年以降の整地層である。

2層の焼土層の下層は、旧耕作土（床土層も含む）・基盤層となっており、いわゆる遺物包含層は認められなかった。

基盤層は黄灰色シルト混じり極細砂～シルト質極細砂であり、この層の上面から縄文時代後期の土器の細片が出土している。

遺構の検出

遺構面は1面のみである。弥生時代の遺構も中世の遺構も基盤層上面で検出した。



第27図 土層断面図

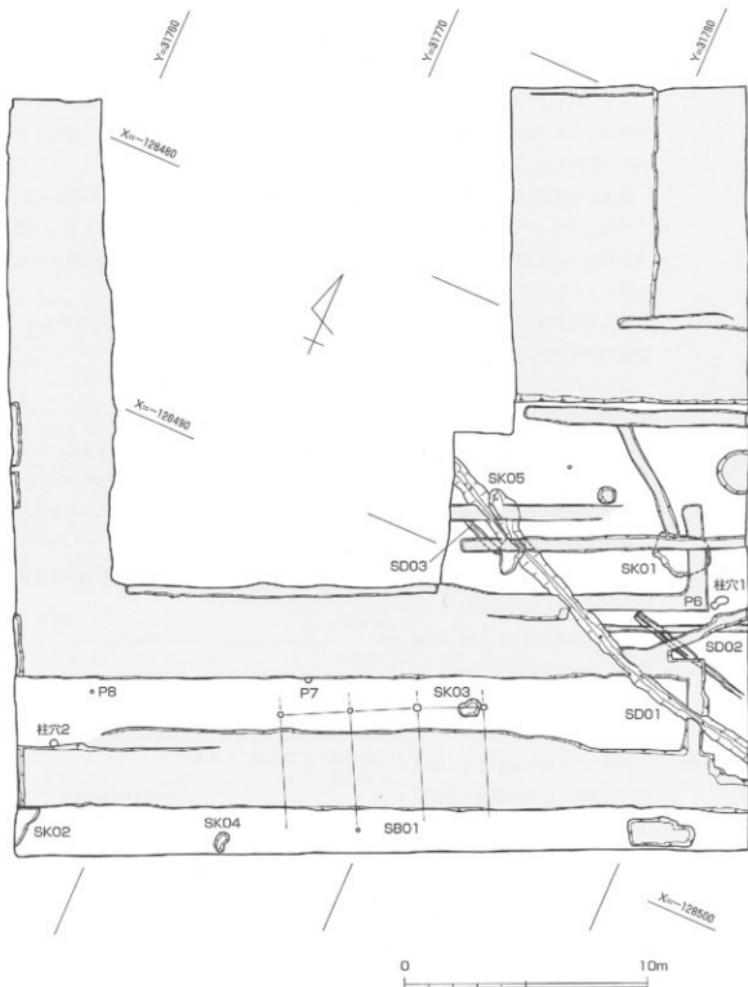
3. 遺構と遺物

検出遺構

遺構としては、溝・掘立柱建物跡・柱穴・土坑・ピットを検出した。

遺構の時期判別は、出土土器を基本としたが、遺構から土器が出土しない場合は遺構内埋土の層相によって判断している。弥生時代はSD01を、中世はSK05の層相を基本として判断している。

その結果、遺構の時代をみれば、弥生時代には溝と柱穴が、中世では掘立柱建物、土坑、溝が検出されている。遺構の数が多くなく、以下の説明では時代別ではなくて、遺構別に説明している。



第28図 第2次調査平面図（アミカケは擾乱）

(1) 溝状遺構

溝は3条検出している。SD01のみが規模も大きく、調査区内全域で検出されている。SD02・SD03は擾乱や後世の削平で寸断された状態で検出されている。SD02・SD03は遺構内埋土の層相から中世と捉えているが、弥生時代のSD01と併行に走行していることは気にかかるところである。

SD01(写真図版 12・13・15・17)

検出状況

調査区南東部で検出した(第28図)。SK05と切り合い関係にあり、SK05がSD01を切っている。SD01は南東から北西方向に走る溝で、緩やかに弧状を呈しているように捉えられる。

規模

長さ約17mにわたって検出した。横断面はU字形を呈する。検出面からの深さは25~30cm前後を測るが、上面が大きく削平を受けている可能性が考えられ、本来は50cm以上の深さがあったと想定される。

溝の性格としては、南西に膨らむ弧状を呈しており、集落の周囲をめぐる環濠の可能性も考えられる。溝の規模から環濠と表現するよりも環濠と表現する方が適切であろう。環濠とすれば弧状の内側は北東側になるが、今回の調査では同時期の遺構は柱穴1基のみで、竪穴住居址等の遺構は全く検出されていない。翻って、弧状の外側にあたる南西部では、第1次調査で検出した環濠と同時期の弥生時代中期後半の掘立柱建物群が存在している。

なお、溝底は北西端が南東端に比べて僅かに8cm低くなっている、北西方向に流れている可能性が指摘できるかもしれない。

埋没状況

埋土は基本的に2層(第29図)に分れるが、SK05と切り合い関係のある付近では3層に分別できるところもある。

溝内からは弥生土器片がそれなりに出土しているが、すべて溝底から15~25cm前後の上位で出土している。その層相は埋土上層の灰褐色シルト質極細砂内に包含されている。土器は弥生時代中期後半で、この溝はこの時期にほぼ埋没したと捉えられる。

出土遺物

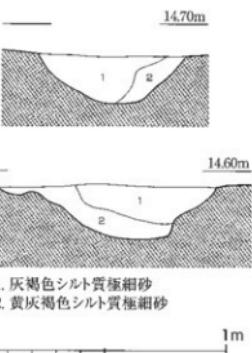
弥生土器の器種で図示したものは壺と甕であるが、小片で図示していないものの中には器台等が出土している。

10は広口壺の口頭部片で、摩滅のため文様や調整痕は不鮮明であるが、口縁端面に横波状文、頭部外面に綫方向のハケ調整を認めることができる。口縁端部は上下に拡張している。

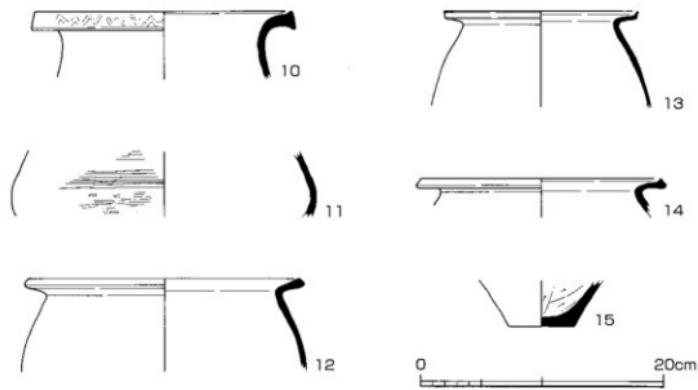
11は壺胴部片で、胴部最大径の上部に櫛撚直線文を2単位で飾っている。下の直線文は7条で、上の直線文は4以上である。文様下の外面には横方向のヘラミガキが施されているが、内面の調整は摩滅のため不明である。

12~14は甕片である。12~14は口縁端部が肥厚しており、13は口縁端部をつまみ上げている。12は外面に不鮮明であるが縦方向のハケ調整がかろうじて観察できるのである。12は口縁部にスス付着の痕跡が認められる。

15は甕底部片で、内面には下から上方向のヘラ削りが認められる。外面は2次焼成で赤変しており、使用時の痕跡であろう。



第29図 SD01



第30図 SD01出土土器

小片で図示していない弥生土器で、器厚1.2cm前後の大形器台の脚部と口縁部、短頸壺、鉢等がある。

器台の脚部小片は外面にヘラ描きによる山形文とみられる文様を、脚端面に退化した凹線文(A種)を施している。口縁部小片は口縁端面に凹線文(A種)2条が認められる。

短頸壺小片は外面に6条の凹線文(B種)を施しているものと口頭部の高さが3.0cmと短いものの二者がある。器種は細片で不明だが、生駒西麓産の胎土をもつものも1点出土している。

時期 出土土器から弥生時代中期後半(畿内第IV様式併行)と判断される。

SD02(写真図版12・13)

検出状況 調査区南東部で検出した(第28図)。SD01の北側に位置する。ほぼ直線的に走る溝で、搅乱や削平等により途中で途切れていると捉えられるが、長さ約5.5mにわたって検出した。検出したほぼ中央で2条に分れている。

規模 横断面はU字形をなし、検出面からの深さ約10cmを測る。

埋没状況 灰色細砂1層からなる。この層相から人為的に埋められた可能性が高いと判断される。

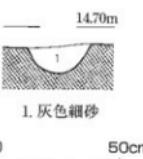
出土遺物 土器小片が出土しているが、時期の特定は困難である。

時期 埋土の層相から平安時代末～鎌倉時代初と捉えている。

SD03(写真図版12・15下)

検出状況 調査区の南東部で検出した(第28図)。SD01の南側を走る溝である。長さ2.0m前後検出した。搅乱や削平でその全貌は不明確であるが、南東方向は溝が収束する状況がみられ、北東方向は搅乱で途切れている。

規模 横断面はU字形をなし、検出面における幅26cm、深さ13cmを測る小規模な溝である。

埋没状況	灰色細砂1層からなる。層相から人為的に埋められた可能性が高いと判断している(第31図)。	
出土遺物	全く出土していない。	
時期	埋土がSK05と同じ層相であることから、平安時代末～鎌倉時代初頭と考えている。	

第31図 SD03

(2) 掘立柱建物跡

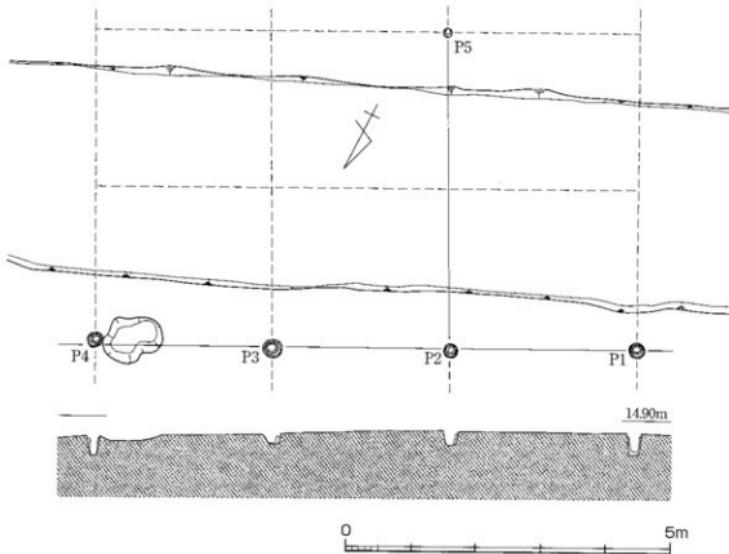
掘立柱建物は1棟を検出したのみである。他に、柱穴2基、ピット3基を検出している。

SB01(写真図版14)

検出状況 調査区南東部と南西部にまたがって検出した(第28図)。後世の擾乱・削平により、その全体を検出できなかつたが、一直線に並んだ4基の柱穴と、この柱列と直交方向の柱穴が南側に距離をおいて1基存在することから掘立柱建物跡であると判断した。

建物規模 検出状況から東西3間、南北2間以上の掘立柱建物である。東西の柱間距離は27～28mとほぼ等間隔である。南北のP2とP5の柱間距離は4.9mである。

柱穴規模 柱穴は5基検出した。柱穴の平面形は円形で、掘り方径は、P1が22cm、P2が23cm、P3が30cm、P4が22cmである。柱痕跡の径は、P1が18cm、P2が18cm、P3が19cm、P4が15cmである。



第32図 SB01

出土遺物 P 1とP 2から土器の小片が出土している。小片からは時期の特定は困難であるが、中世土器的な胎土の特徴を示していると捉えている。なお、P 3とP 4からは基盤層上面に包含されていたと考えられる縄文土器（後期）小片が出土していることを付記しておく。

時 期 柱穴埋土がSK05と同じ層相を示すことと土器小片が中世的胎土をもつことから、平安時代末～鎌倉時代初頭と考えている。

(3) 柱穴とピット（第28図）

建物を構成する柱穴ではないが、柱穴は2基検出した。柱穴1はSD01の内側で、柱穴2はSD01の外側、調査区西壁付近で検出した。柱穴1・2とも土器は全く出土していないが、SD01と類似した埋土であることから柱穴1・2は弥生時代中期のものと判断した。

明確な柱痕跡が確認されないものをピットとした。P 6～P 8の3基を検出（第28図）しており、P 6は柱穴1と接して、P 7はSB01の付近から、P 8は柱穴2の北側2.5mの位置から検出した。P 6～P 8からは土器は全く出土していないが、埋土がSK05と類似した層相を示すことから、平安時代末～鎌倉時代初頭と判断している。

(4) 土坑

5基を検出した。

SK01（写真図版16上）

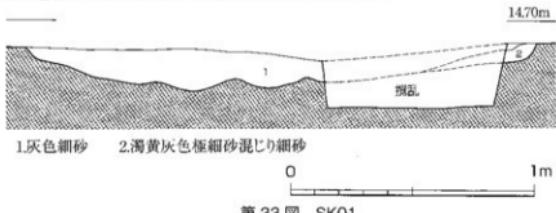
検出状況 調査区南東部で検出した（第28図）。SD01の北側に位置する。後世の搅乱で、その全容は窺えない。

規 模 平面形は不整形な橢円形に復原できるであろう。復原的にみて長軸23m、短軸1.7mほどの規模であろう。横断面は浅い皿状の形状で、その底面は一様でない。最深部における検出面からの深さは17cmを測る。

埋没状況 基本的には灰色細砂1層からなるが、東肩部に壁が崩れた埋土（濁黄灰色極細砂混じり細砂）が部分的に認められるところがある。

出土遺物 土器小片と鉄器小片が出土している。鉄器小片は長さ1.7cm、径0.55～0.65cmの棒状の鉄器片である。土器は小片で時期の特定は困難である。埋土の層相から平安時代末～鎌倉時代初の時期と判断している。なお、18世紀の肥前系染付陶器や19世紀の京焼系の透明釉陶器などの近世の遺物の混入がみられた。

時 期 埋土の層相から平安時代末～鎌倉時代初頭と考えている。



第33図 SK01

SK02

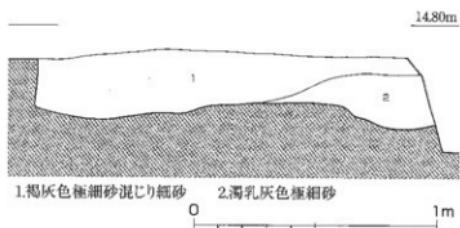
検出状況 調査区南西部の西隅で検出した(第28図)。後世の擾乱と土坑が調査区によって限られており、その全体の1/4程度検出したのみであり、その全形は窺い知れない。

規模 規模は不明であるが、2m以上の規模をもつ土坑である。平面形は明らかにできないが、おそらく楕円形を呈するであろう。横断面をみれば、南の壁はほぼ垂直な形状であり、板材を設置していたかもしれない。床面は一様でない。最深部における検出面からの深さは30cmを測る。

埋没状況 2層からなる。

出土遺物 須恵器小片1点が出土しているが、時期を判別できる資料ではない。

時期 埋土の層相から平安時代末～鎌倉時代初と考えている。



第34図 SK02

SK03(写真図版16中)

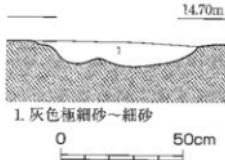
検出状況 調査区南東部で検出した(第28図)。SB01のP4の南側に接して検出された。

規模 平面形は不整な楕円形を呈している。長軸92cm、短軸70cmである。横断面は皿状の形状であるが、底面は一様でない。最深部における検出面からの深さは10cmを測る。

埋没状況 灰色極細砂～細砂の1層からなる。その層相から人為的に埋められたものと判断される。

出土遺物 須恵器小片1点が出土している。この小片は中世前後のものとみられるが、この細片のみでこの土坑の時期を決めるのは困難であり、無謀でもある。

時期 埋土の層相から、平安時代末～鎌倉時代末と考えている。



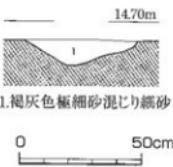
第35図 SK03

SK04(写真図版16下)

検出状況 調査区南西部で検出した(第28図)。

規模 平面形は不整な楕円形を呈している。長軸80cm、短軸50cmである。横断面は皿状を呈している。最深部における検出面からの深さは10cmを測る。

埋没状況 灰色極細砂混じり細砂1層からなる。この層相から人為的に埋められたものと判断される。この層には灰が含まれていた。



第36 SK04

出土遺物 全く出土していない。
時期 埋土の層相から平安時代末～鎌倉時代とを考えている。

SK05(写真図版 15 中・17)

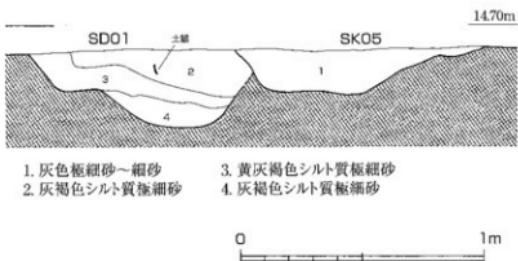
検出状況 調査区南東部で検出した(第28図)。SD01を切ってつくられているが、後世の搅乱が著しくその全体の形状を捉え難くしている。

規模 平面形は不整な長楕円形を呈していると推定している。長軸350cm、短軸60cmである。横断面は皿状を呈する。最深部における検出面からの深さは18cmを測る。

埋没状況 灰色極細砂～細砂1層からなる。その層相から人為的に埋められたものと判断される。

出土遺物 図示していないが、比較的大きな土師器底部破片が出土している。この土器底部には回転糸切り底をもち、平安時代末～鎌倉時代初頭の時期である。他に土器のごく小片が出土しているが時期の特定は困難なものである。他に、長さ23cm、幅15cm、厚み0.5cmの鉄片1点が出土している。

時期 埋土の層相と土師器底部の破片から平安時代末～鎌倉時代初頭の時期と考えている。



第37図 SK05とSD01

(5) その他

SB01のP3とP4でも縄文土器の小片が出土したことは前述しているが、遺構面精査時にも基盤層上面から縄文時代後期の土器小片が4点ほど出土している。また、搅乱層の中から16世紀の中国製の染付けや18～19世紀の肥前系陶器、京焼系陶器、土師器焰硝などが出土していることを付記しておきたい。

第3章 まとめ

はじめに

前章において、2次に及ぶ調査(第1次調査・第2次調査)の結果を報告してきた。この結果、弥生時代中期(Ⅰ期)・古墳時代前期(Ⅱ期)・平安時代後期～鎌倉時代前半(Ⅲ期)の3時期の遺構が明らかとなった。以下、その概要を記し、本報告のまとめとしたい。

I期

第1次調査では掘立柱建物跡5棟(SB01～SB05)と3条の溝(SD01～SD03)を検出した。これらの掘立柱建物と溝はその方向性をほぼ同じくすることから、両者が有機的な関連性をもっていたものと理解できる。具体的には、溝が掘立柱建物群を区画する機能を有していたものと考えられる。

第2次調査では、SD01と柱穴1・柱穴2が当該期の遺構に該当する。ただし、この溝と第1次調査で検出した遺構群との関係を明らかにすることは困難である。さらには、第2次調査SD01との関係についても、本報告では明確にすることは困難である。

II期

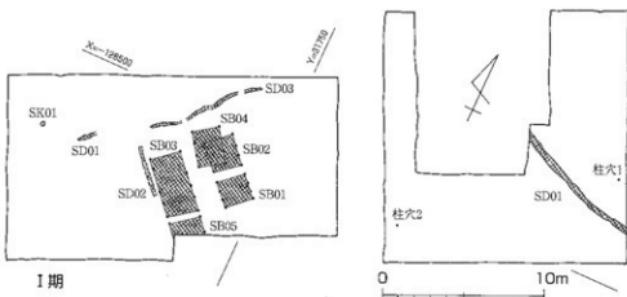
第1次調査で検出したSK02とSK03が該当する。第2次調査では当該期の遺構は検出されていない。SK03については、底から炭化米が多量に付着した甕が出土しており、貯蔵穴の可能性が考えられる。

III期

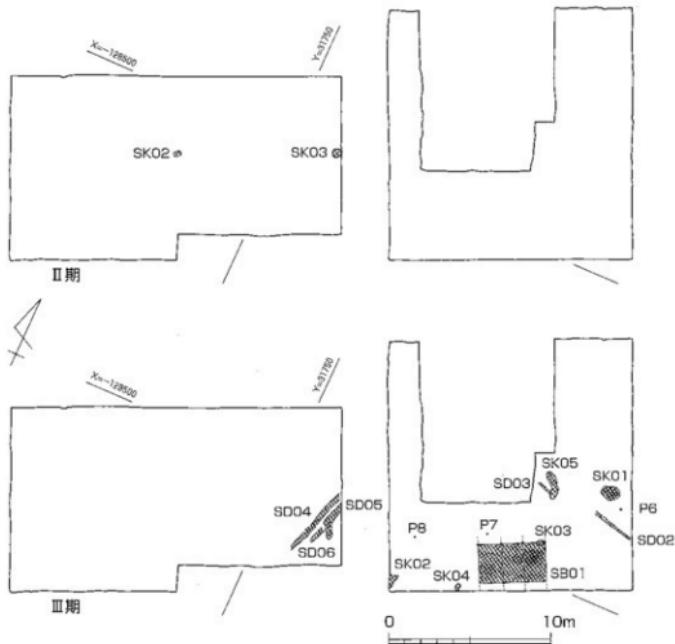
第1次調査ではSD04～SD06が、第2次調査ではSB01・SD02・SD03・SK01～SK05・柱穴・ピットが、該当する。第1次調査で検出した溝と第2次調査で検出した溝とはほぼ直交関係にあり、有機的な関連が考えられる。これに対して、SB01とは方向性を異にし、溝とSB01との間には微妙な時期差が考えられる。

小結

以上から、I期が当遺跡のひとつの中心的な時期と考えられる。この時期は、弥生時代中期後半にあたり、銅鐸の鋳型が出土した名古山遺跡・今宿丁田遺跡と同時期に位置付けられる。しかし、今回の調査では、名古山遺跡との関連を直接的結びつけるような遺構・遺物は見つかなかった。



第38図 遺構の変遷(1)



第39図 遺構の変遷（2）

出土土器観察表

報告 No	調査 次數	出土 遺構	種別	器種	残存	口径 (cm)	基高 (cm)	底径 (cm)	色調	胎土	備考	持 國	写真 図版
1	1	S B02	弥生	壺	口縁部2/3 体部1/5	16.6	17.9		浅黄橙	1mm以下の石英含む	断径12.1cm	26	18
2	1	S B02	弥生	壺	口縁部1/4	16.5	6.6		にぶい黄 ～灰白	0.2～2mm大の石英・ 長石・チャート含む		26	18
3	1	包含層	弥生	壺	底部1/3		2.9	7.1	にぶい黄 ～明黄褐	0.1～0.5mm大の石英・ 長石多く含む		26	18
4	1	S B03	弥生	壺	底部1/4		2.5	5.7	黄灰～黒	0.5mm大の砂粒わずか に含む		26	18
5	1	S B03	弥生	鉢	口縁部1/4底	13.0	5.7		浅黄橙	0.2～1mm大の石英・ 赤色粒わずかに含む		26	18
6	1	S B02	弥生	脚部	底部1/6		2.9	11.6	浅黄橙～ にぶい橙	0.5～2mm大の石英・ チャート含む		26	18
7	1	S B03	弥生	器台	底部1/8		7.1	29.7	浅黄橙～灰黄	0.15～4mm大の長石・ チャート含む		26	18
8	1	S D02	弥生	壺	底部1/4		4.8	9.0	浅黄橙～灰黄	1mm大のチャート・長 石含む		26	18
9	1	S K03	弥生	壺	体部下半は 「2完存」		16.1		にぶい黄褐 ～にぶい黄橙	0.3～1.5mm大の石英・ 長石・チャートやや 多く含む	外面麻多量に 付着	26	19
10	2	S D01	弥生	壺	口縁部1/3	21.0	5.6		にぶい黄橙	0.5～2mm大の長石・ クサリレキ多く含む	頭径16.5cm	30	19
11	2	S D01	弥生	壺	体部わずか		5.4		浅黄橙～灰白	0.5mm以下の石英わず かに含む	体部径25.0cm	30	19
12	2	S D01	弥生	壺	口縁部1/6	22.2	7.6		浅黄橙	0.5～5mm大の長石・ チャート・クサリレ キ含む	頭径18.2cm	30	19
13	2	S D01	弥生	壺	口縁部1/16 体部1/8	15.8	7.9		浅黄橙～灰白	0.5～2mm大の長石・ チャート・クサリレ キ多く含む	頭径12.8cm	30	19
14	2	S D01	弥生	壺	口縁部1/4	19.5	3.2		にぶい黄橙	0.1～0.5mm大の石英 わずかに含む	頭径16.4cm	30	19
15	2	S D01	弥生	壺	底部3/5		4.8	5.4	にぶい橙 ～褐色	0.1～0.5mm大の石英 わずかに含む		30	19

報告書抄録

ふりがな	いわばなちょういせき							
書名	岩端町遺跡							
副書名	処遇管理棟・庁舎棟等新営工事に伴う発掘調査							
卷次	兵庫県埋蔵文化財調査報告 第307冊							
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	山本三郎・山田清朝							
編集機関	兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所							
所在地	〒652-0032 神戸市兵庫区荒田町2丁目1番5号						TEL 078-531-7011	
発行年月日	西暦2006(平成18)年3月20日							
所収 遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
いわばなちょう 岩端町 いわばなちょう 遺跡	ひょうごけん 兵庫県 姫路市 いわばなちょう 岩端町	2000185 28201	34度 50分 28秒	134度 40分 49秒	平成12年5月9日 ～6月13日	859m ²	処遇管理棟 新営工事	
		2003190			平成15年11月26日 ～12月26日	617m ²	庁舎棟等 新営工事	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
岩端町遺跡 第1次調査	集落跡	弥生時代中期後半	掘立柱建物跡 溝・土坑	土器 サヌカイト製石器				
		古墳時代初頭	土坑	土師器	土器内面に炭化 米付着			
		平安時代後期 ～鎌倉時代初頭	溝	土師器				
岩端町遺跡 第2次調査	集落跡	弥生時代中期後半	溝	土器	生駒西麓産土器			
		平安時代後期 ～鎌倉時代初頭	掘立柱建物跡 溝・土坑	須恵器・土師器				

写 真 図 版



写真図版 1 岩端町遺跡



米軍空中写真
(昭和 21 年～ 23 年撮影)



遺跡遠景

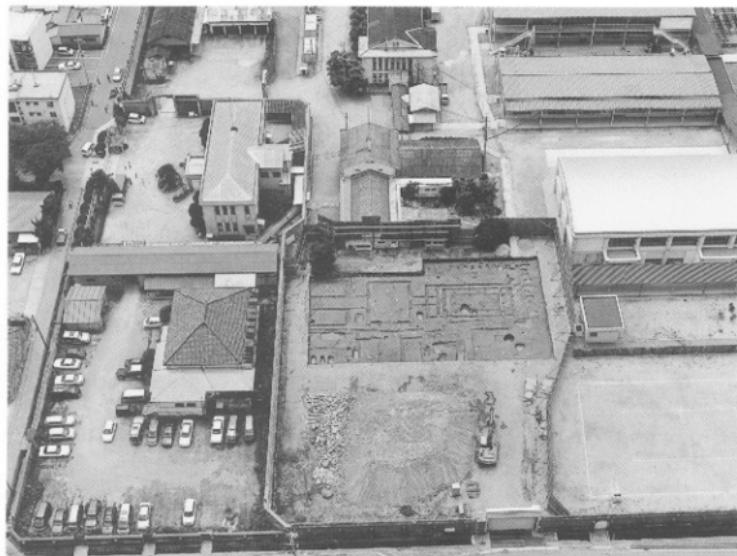
南上空から



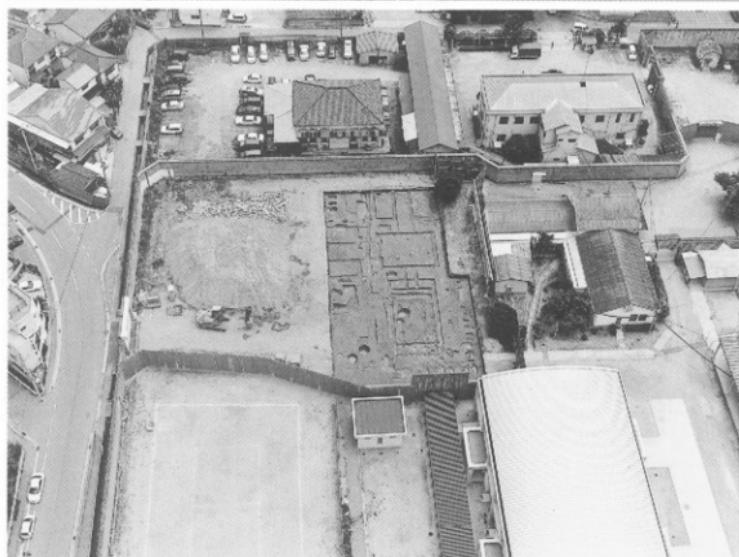
遺跡遠景

北東上空から

写真図版3 第1次調査



全景 北東上空から

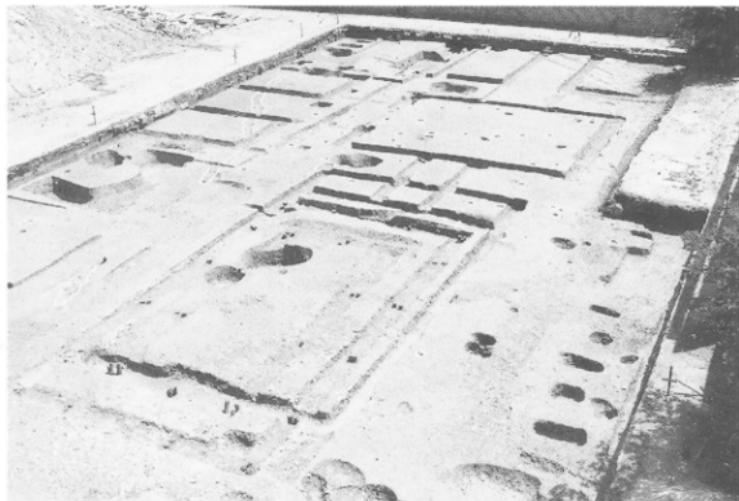


全景 北西上空から



全景 真上から

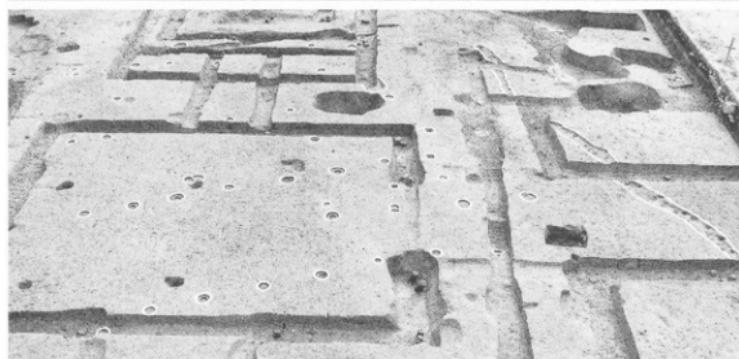
写真図版5 第1次調査



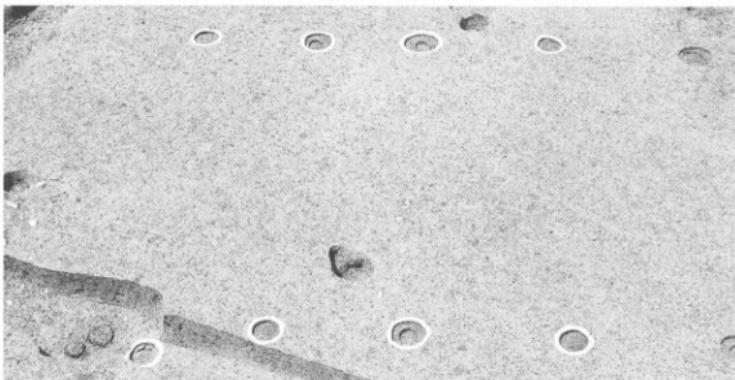
全景 南西から



建物群 北西から



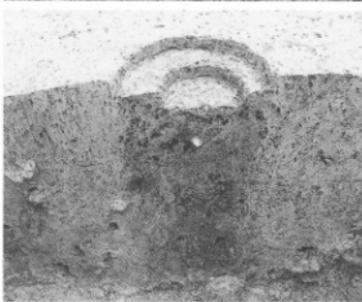
建物群 北東から



SB01 北東から



(左) SB01-P1
南から
(右) SB01-P2
南から



(左) SB01-P3
南から
(右) SB01-P4
南から



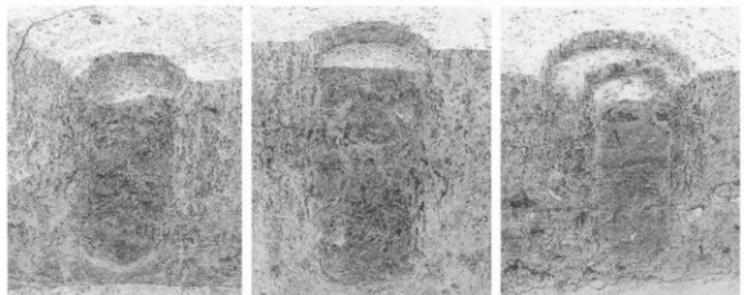
(左) SB01-P7
北から
(右) SB01-P8
北から



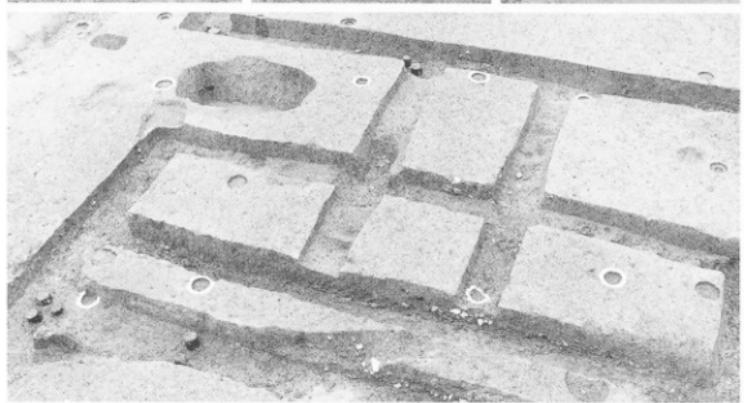
写真図版7 第1次調査



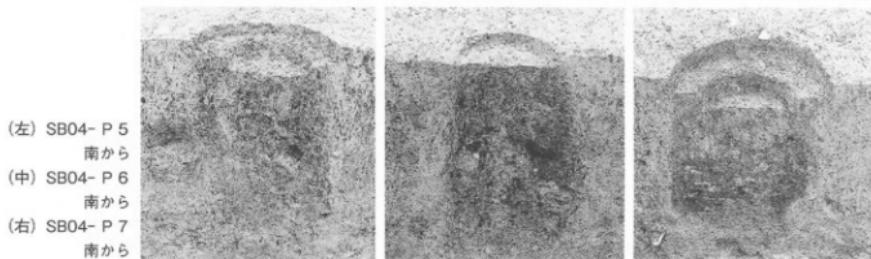
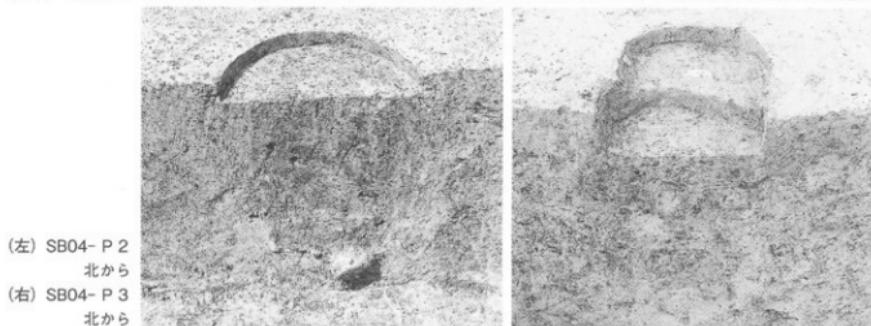
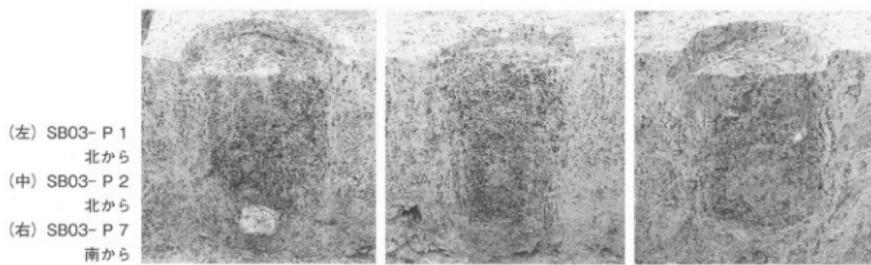
SB02 北東から



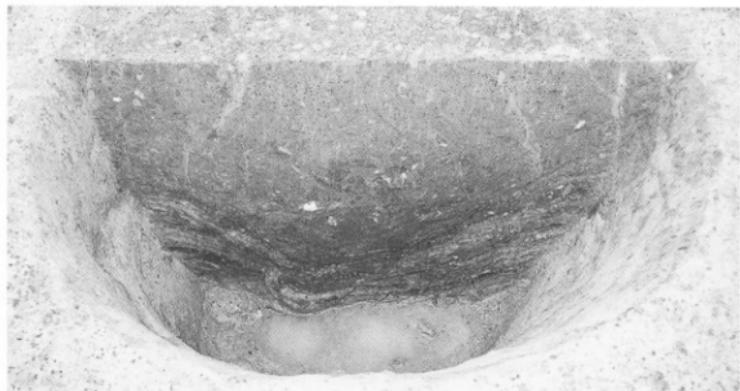
(左) SB02- P 2
北から
(中) SB02- P 3
北から
(右) SB02- P 4
北から



SB03 南西から



写真図版9 第1次調査



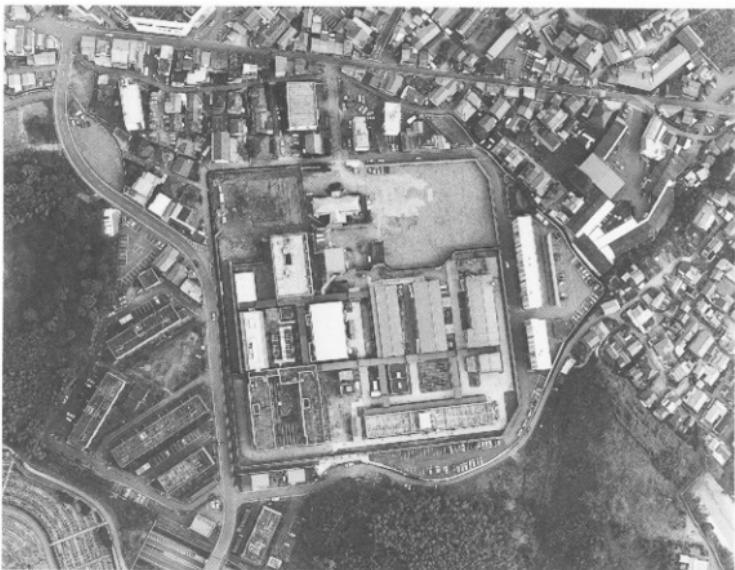
SK03 断面 南西から



SK03 土器出土状況
南西から



SD02 断面 西から



全景 西上空から



全景 北上空から

写真図版 11 第2次調査



全景 真上から



東側の遺構 南から



SD01 ~ SD03
東から

写真図版 13 第 2 次調査



SD01・SD02
東から



SD01 遺物出土状態
北西から



SB01 西から

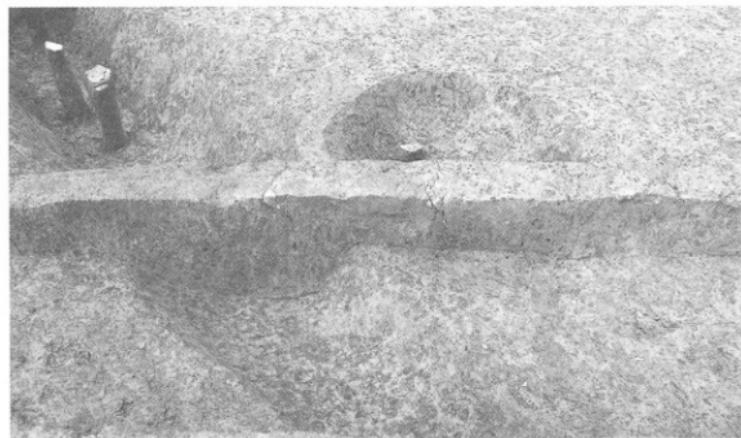


土坑群と溝 北から

写真図版 15 第 2 次調査



SD01 土層断面
北西から



SD01 と SK05 の
土層断面南から



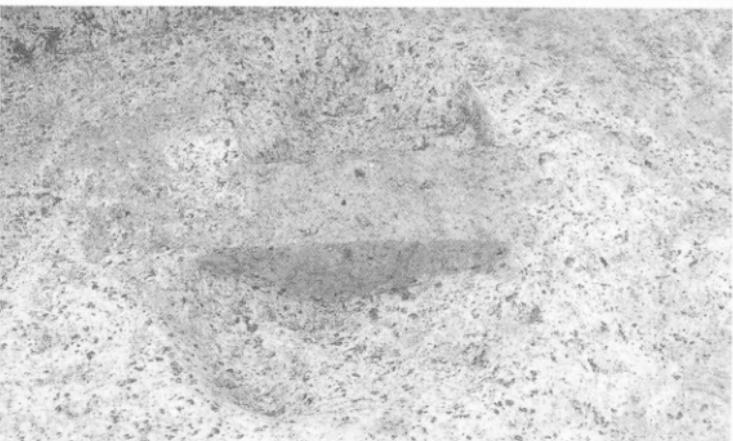
SD03 土層断面
南から



SK01 土層断面
南から



SK03 土層断面
東から



SK04 土層断面
北から

写真図版 17 第 2 次調査

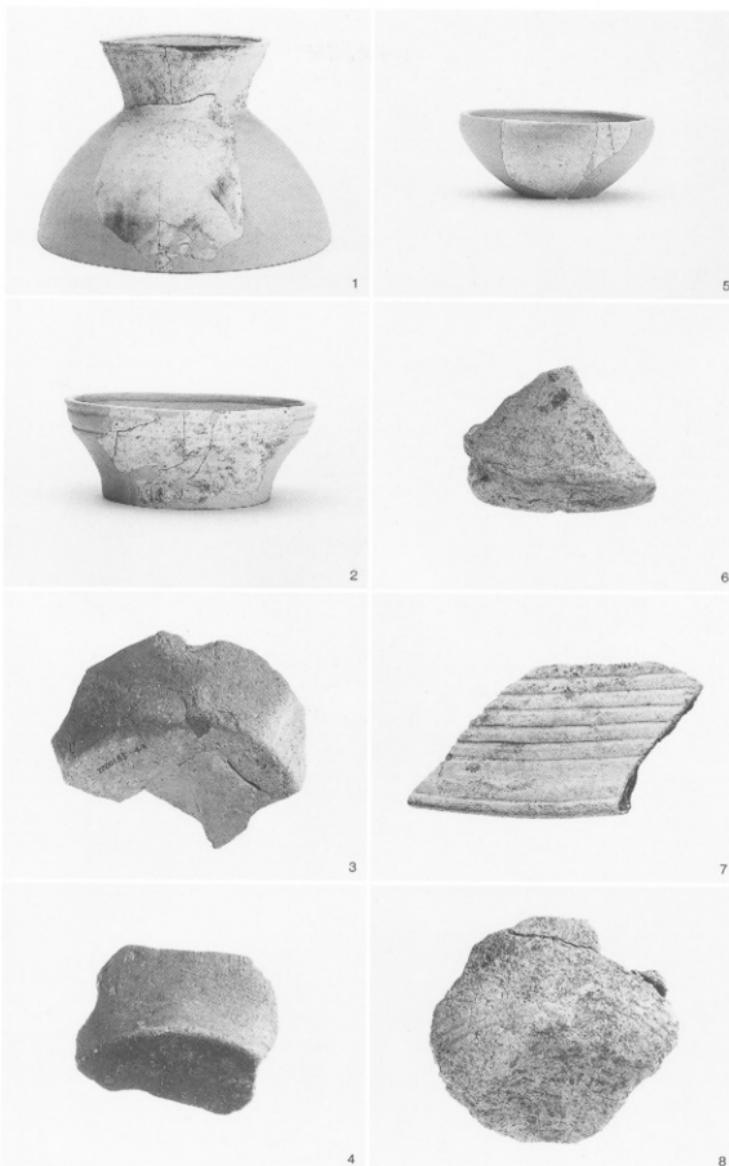


SD01 と SK05 の関係
西から



南西壁土層断面
北から

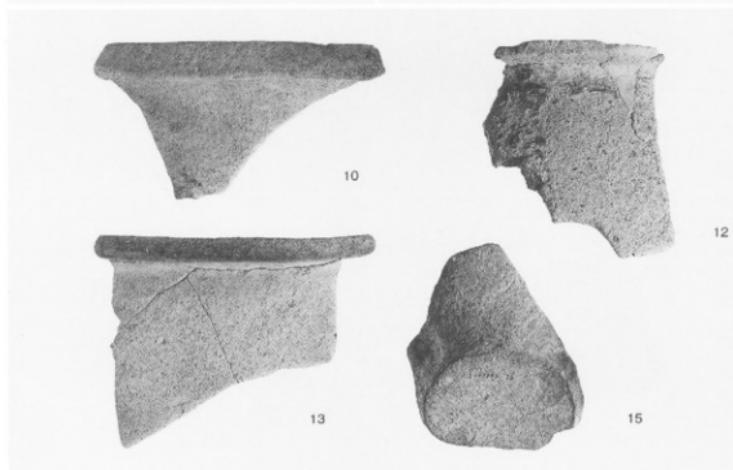
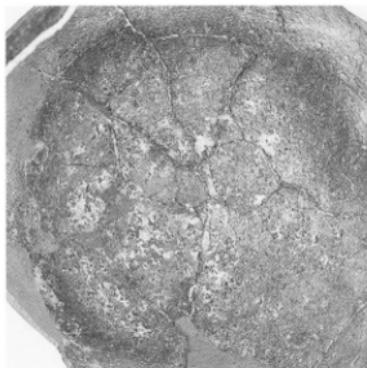
写真図版 18 出土遺物（第 1 次調査）



SB02 出土土器（1・2・6） SB03 出土土器（4・5・7） SD02 出土土器（8）

第 1 次調査包含層出土土器（3）

写真図版 19 出土遺物（第 1・2 次調査）



SK03 出土土器 (9) 第 2 次調査 SD01 出土土器 (10 ~ 15)

第 1 次調査出土石器 (S1)

兵庫県文化財調査報告 第307冊

姫路市 岩端町 遺跡

— 処遇管理棟・廈舎棟等新築工事に伴う発掘調査 —

平成18年3月20日 発行

編集 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

〒652-0032 神戸市兵庫区荒田町2丁目1-5

発行 兵庫県教育委員会

〒650-8567 神戸市中央区下山手通5丁目10-1

印刷 ウニスガ印刷株式会社

〒677-0053 兵庫県西脇市和布町39